

「低廉宿泊施設の利用促進キャンペーン」

アンケート調査結果報告書

(平成22年9月28日 大宮)

社団法人 日本民宿協会

調査の背景と目的

現在、日本には約 24,000 軒の民宿が存在するといわれている。民宿の集中地域は、主に上信越地域、房総・伊豆地域、若狭・但馬地域であり（参考資料を参照のこと）、このうち上信越地域はスキー場を中心に形成された山岳型民宿地域、房総・伊豆および若狭・但馬地域は海水浴場を中心に形成された海浜型民宿地域である。さらに、近年ではスポーツ・レクリエーション機能を有する民宿地域や、国によるグリーンツーリズムの推進にともなう農林漁業体験民宿の発達も著しく、民宿の機能が多様化している。

明確な統計資料はないが、約 24,000 軒の民宿のうち、形式上登録はしていても、実際には休業状態にある民宿がかなり存在している。こうした民宿は、特に平成不況以降、増加傾向にあるようである。その一方で、比較的高料金であった旅館が低廉化を図り、滞在型旅館を志向しつつある。こうした旅館への宿泊客の流出は、民宿の経営悪化を引き起こしている。

当協会の調査によると、関東地方のある温泉地では、湯治場としての低廉な自炊旅館が相次いで観光化を図っている。また、この温泉地の民宿は、「旅館」と銘打って民宿からの脱却を図り、ほとんどの民宿が姿を消している。全国的にも、最近数年で「民宿旅館」という名称が急増しており、民宿本来の持つ個性が消えつつあるとともに、民宿の経営に大きな変革がみられる。

しかしながら、民宿本来の機能が日本の観光文化の一翼をなしていることには変わりがない。近年では政府によるインバウンド促進政策の中で、民宿の機能が注目されはじめており、当協会でも外国人からの問い合わせが非常に多くなってきている。特に、フランスやオーストラリア、イギリス、台湾などから民宿での長期滞在を希望するツーリストの問い合わせが多い。今後の民宿経営においては、必要以上のラグジュアリー化などは必ずしも得策とはいえないのではないだろうか。むしろ、さまざまな日本の宿泊施設の中で民宿の位置づけを明確化し、民宿の独自性を打ち出すべきであろう。こうした枠組みの中で、国、地方公共団体、および民間の各機関が協力し合い、民宿地域の活性化を促進することが必要である。

当協会は、このような背景をふまえ、今年度も民宿に対する要望などを調査する機会を設けた。調査の結果合計で 446 人の回答が得られたので、以下に報告する。

表1 アンケート調査票

1. 年 齢	10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代以上
2. 性 別	男性 女性
3. 職 業	会社員 公務員 サービス業 自営業 学生 教員 主婦 アルバイト (パート) 無職 その他 ()
4. 社団法人日本民宿協会を知っていますか	知っている 知らない
5. 民宿の宿泊経験はありますか	ある (回) ない
6. 民宿を利用する最も季節は	春 夏 秋 冬 こだわらない
7. 民宿を選ぶ基準は	料金 料理 施設(部屋・風呂等) 雰囲気 観光 その他 ()
8. 民宿に宿泊して良かった事は	サービス 料理 施設 衛生面 料金 環境 その他 ()
9. 民宿に宿泊して悪かった事は	サービス 料理 施設 衛生面 料金 環境 その他 ()
10. 民宿のイメージ	家庭的 新鮮な料理 低料金 独特な雰囲気 その他 ()
11. 民宿の希望料理は	郷土料理 創作料理 和食 洋食 その他 ()
12. どのような人と民宿を利用しますか	家族・夫婦 友人・仲間 慰安旅行 一人旅 仕事 合宿 その他 ()
13. (イ) 農・漁業等の体験型民宿を知っていますか	知っている 知らない
(ロ) 利用してみたいですか	利用したい 利用したくない わからない
14. 民宿の希望料金は	5,000 円以下 5,000～7,000 円 7,000～9,000 円 9,000～10,000 円 10,000 円以上
15. 最も旅行したい地域は	北海道 東北 関東 東海 近畿 北陸 信越 中国 四国 九州 沖縄 特になし
16. 民宿に対する御意見・ご要望などをお書き下さい	

調査結果

1. アンケート回答者の属性 (図 1)

回答者の年齢で多かったのは 60 代 (151 人, 全体の 33.9%) および 50 代 (113 人, 25.3%) で, 性別で見ると女性 (295 人, 66.1%) の方が男性 (142 人, 31.8%) よりも多かった. 回答者のうち 171 人 (38.3%) が主婦で, 他には会社員 (79 人, 17.7%), 無職 (79 人, 17.7%) が多かった.

2. 民宿宿泊経験および日本民宿協会の認知度 (図 2)

回答者のうち 365 人 (81.8%) が民宿に宿泊した経験を持っていたが, 民宿協会の存在については知らない者 (282 人, 63.2%) が多かった.

3. 民宿のイメージと宿泊後の感想 (図 3)

民宿のイメージ (複数回答可) として, 家庭的 (241 人), 低料金 (180 人), 新鮮な料理 (134 人) を挙げる者が多かった. 民宿に宿泊した経験のある者に対しては, 宿泊した民宿の良かった点と悪かった点についても回答を求めた (複数回答可). その結果, 良かった点については, 料理 (209 人), 料金 (168 人), サービス (90 人) の順で, 悪かった点は衛生面 (105 人), 施設 (93 人), サービス (45 人) の順で, それぞれ回答が多かった.

4. 民宿に対する希望 (図 4)

民宿を選ぶ基準 (複数回答可) については, 料金 (234 人), 料理 (216 人), 施設 (127 人) の順に回答が多かった. 民宿の希望料金 (複数回答可) としては, 5,000 円以上 7,000 円未満を挙げた者が 263 人と最も多かった. また, 民宿で期待したい料理 (複数回答可) を調べたところ, 郷土料理 (310 人) が圧倒的に多く, 和食 (127 人) がそれに続いた.

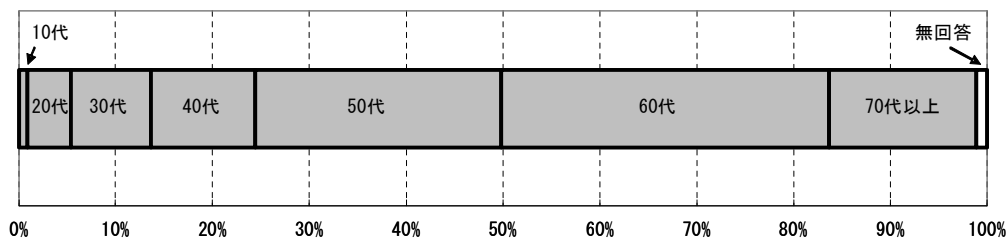
5. 希望する旅行形態 (図 5)

旅行したい季節として人気が高かったのは夏 (181 人) および秋 (140 人) であったが, こだわらないと回答した者も 107 人いた. 民宿をどのような人達と一緒に利用したいかを調べたところ (複数回答可), ほとんどの回答者が家族・夫婦 (328 人) または友人・仲間 (156 人) を挙げていた. 今後旅行してみたい地域 (複数回答可) は, 東北 (168 人) が最も多く, 北海道 (108 人), 関東 (73%), 北陸 (69%) が続いた.

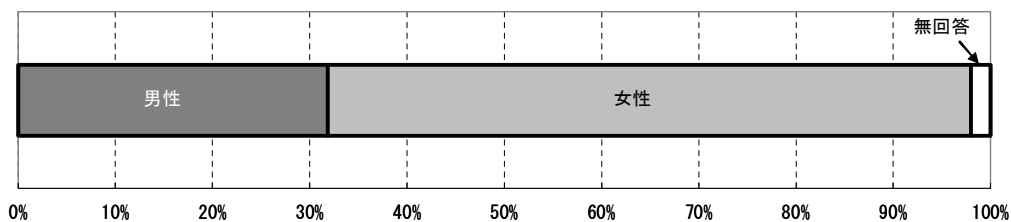
6. 体験型民宿の認知度と利用希望 (図6)

体験型民宿を知っている回答者は、全体の37.7% (168人)にとどまったが、全体の65.9% (294人)が利用してみたいと回答していた。

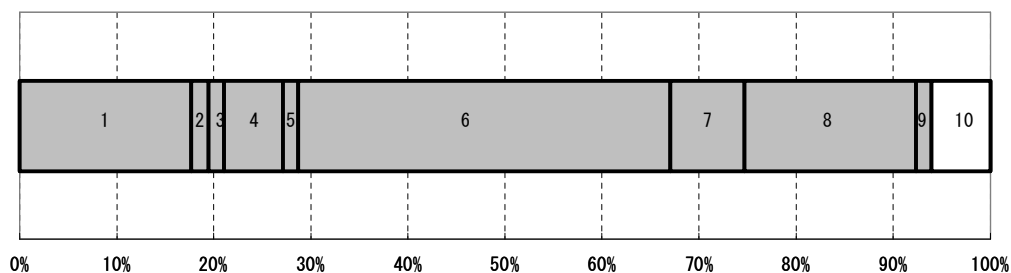
A:年齢層



B:性別



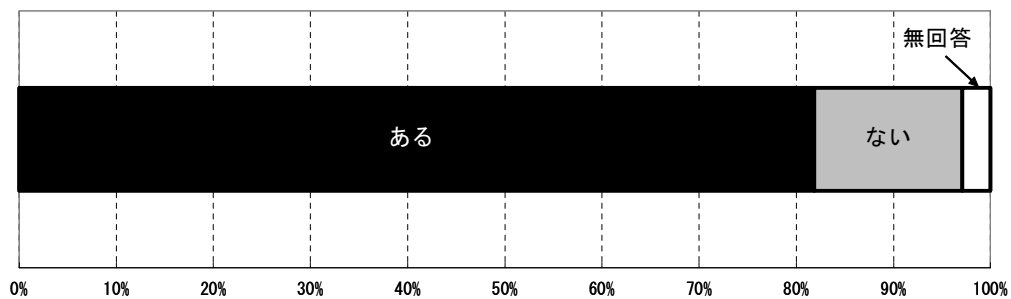
C:職業



1: 会社員, 2: 公務員, 3: サービス業, 4: 自営業, 5: 学生, 6: 主婦, 7: アルバイト (パート), 8: 無職, 9: その他, 10: 無回答 (教員の項目には該当者なし)

図1 アンケート回答者の属性

A: 民宿宿泊経験



B: 日本民宿協会の認知度

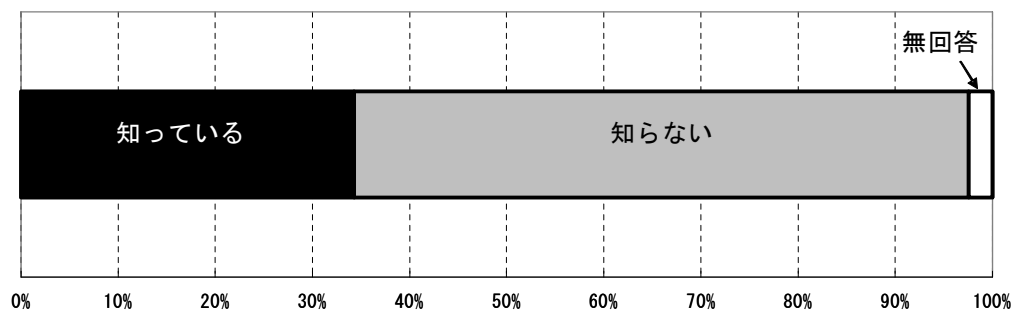


図2 民宿宿泊経験および日本民宿協会の認知度

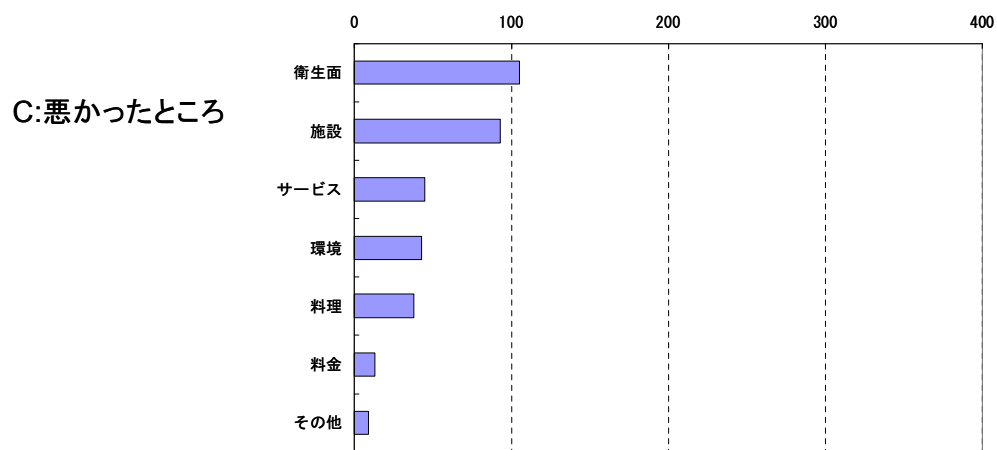
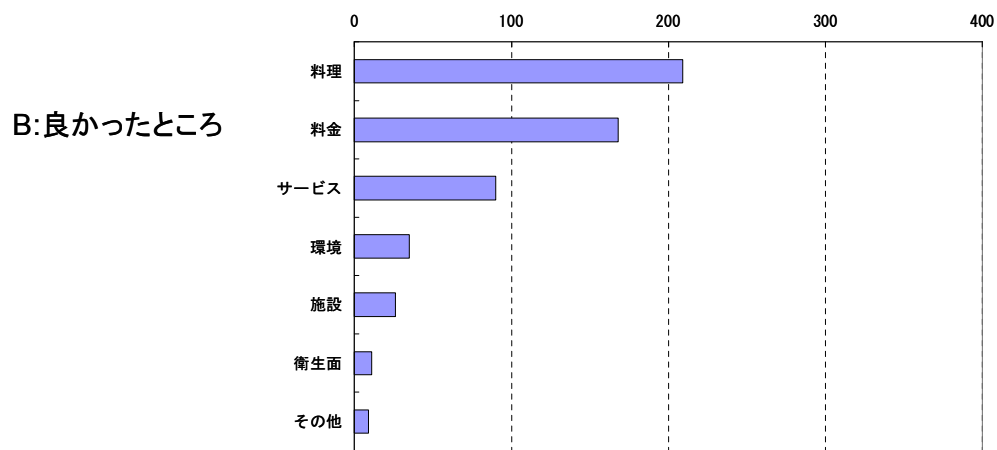
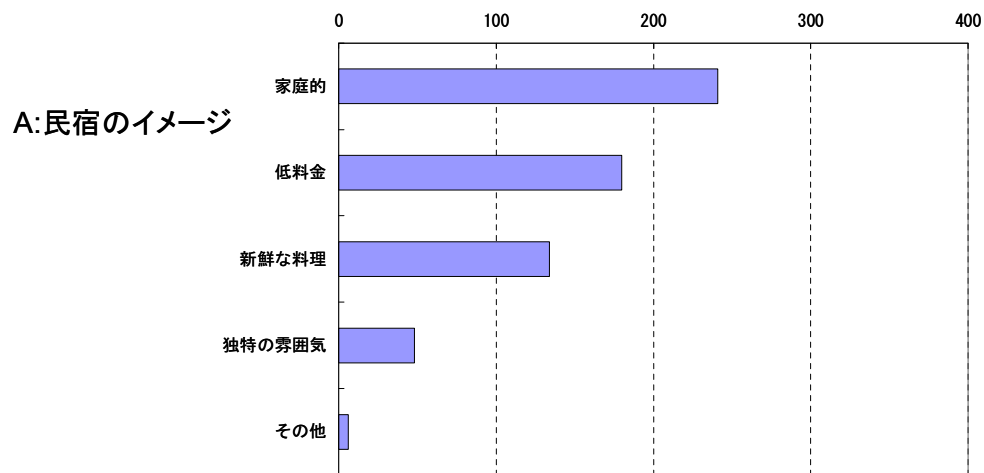
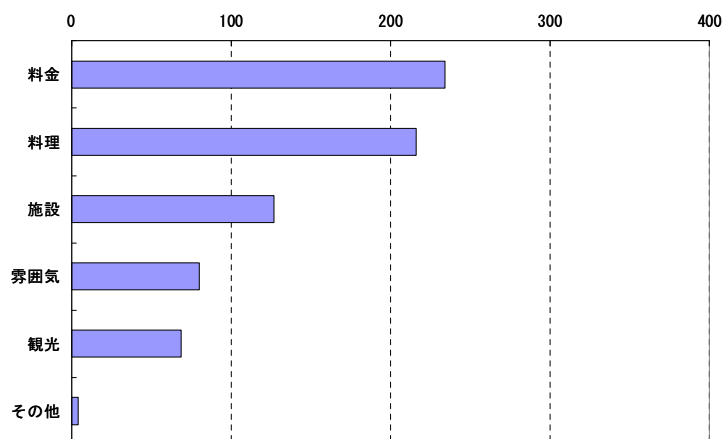
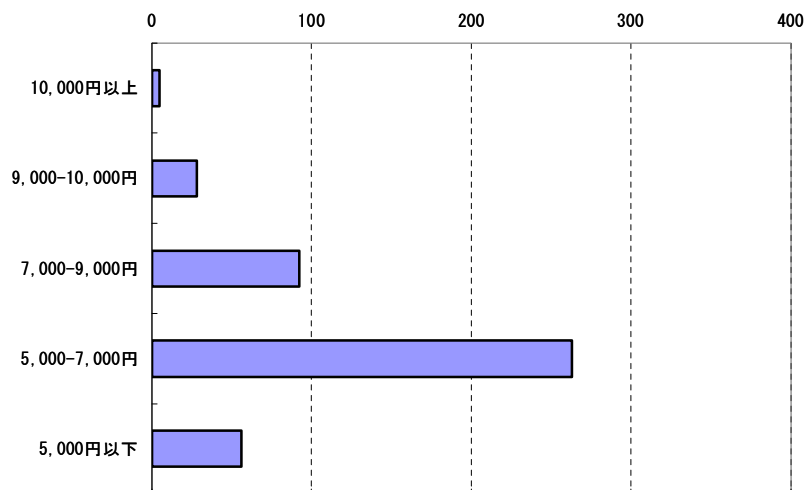


図3 民宿のイメージと宿泊後の感想

A:民宿の選択基準



B:希望料金



C:希望料理

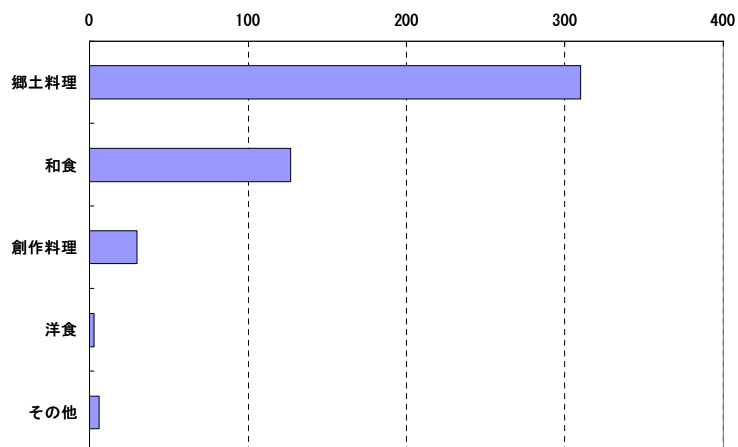


図4 民宿に対する希望

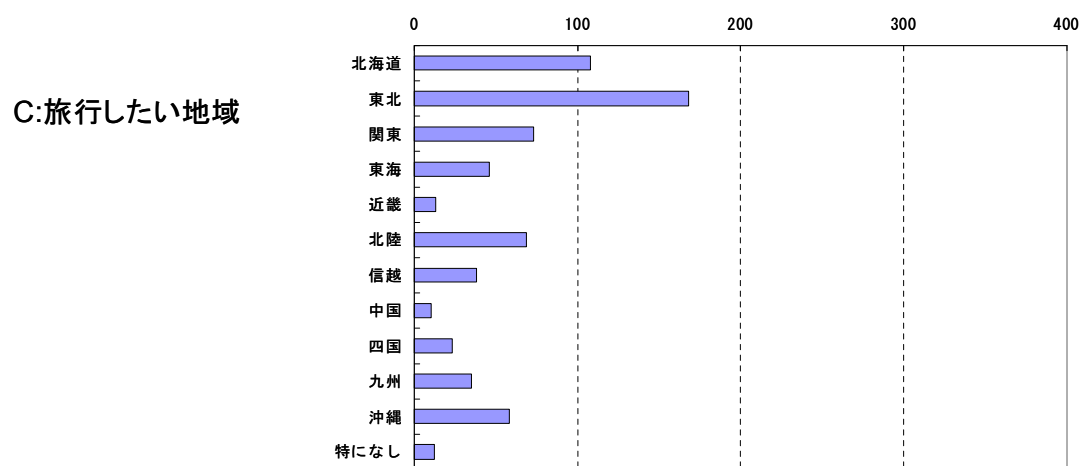
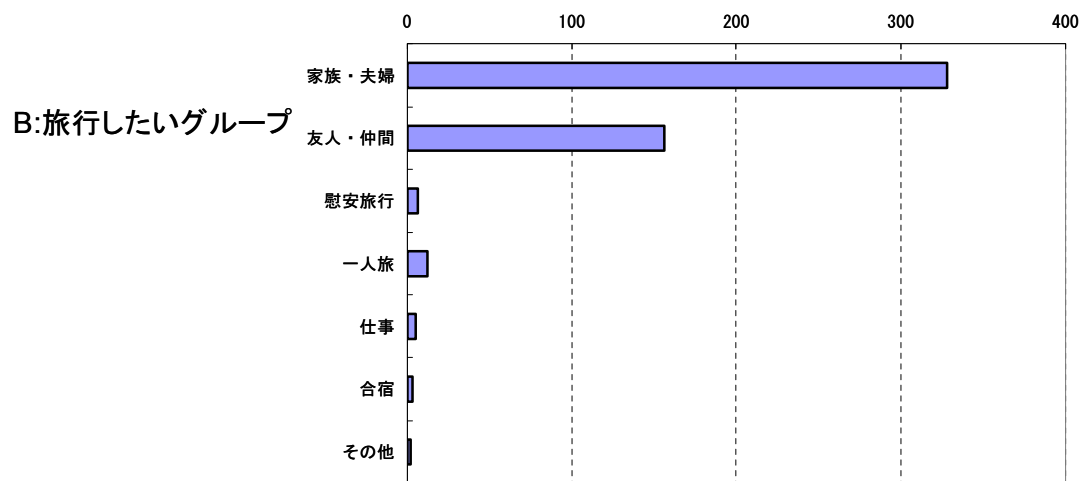
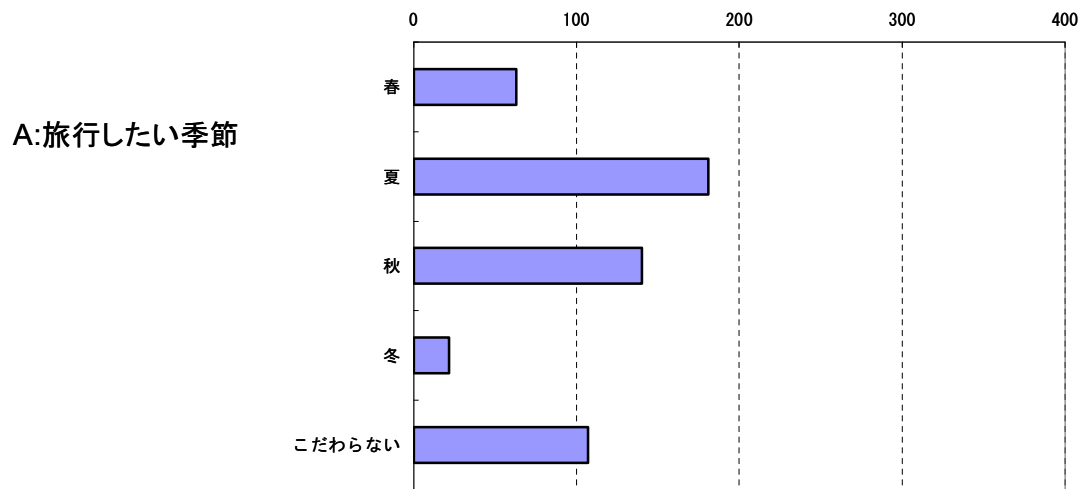
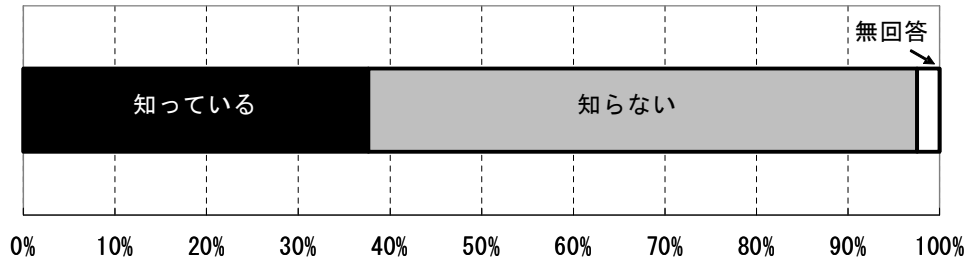


図5 希望する旅行形態

A:体験型民宿の認知度



B:体験型民宿の利用希望

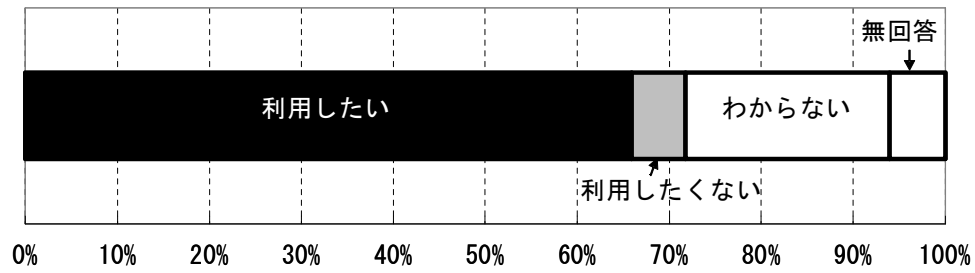


図6 体験型民宿の認知度と利用希望

今後の検討課題

1. アンケートのあり方

今回の回答者は、50～60代の主婦層が中心であった（図1参照）。これは、平日の日中にアンケートを行ったためと考えられる。今後、より多様な曜日や時間帯にアンケートを行うことによって、より様々な属性の回答者から意見を得る必要がある。また、アンケートを行う場所も結果に重要な影響を及ぼす。たとえば、今回のアンケートでは、旅行したい地域として東北を挙げる者が多かったが（図5参照）、これはJR東北新幹線の停車する大宮駅という条件がかなり影響しているはずである。

2. 日本民宿協会の認知度

日本民宿協会としては、協会の認知度がそれほど高くなかったという結果（図2B参照）を真摯に受け止めるべきであろう。多くの人たちに協会のことを知ってもらうためには、ホームページを充実させる、旅行関係の雑誌上に記事を掲載するなどの工夫をしなければならないだろう。

3. 個々の民宿での検討課題

民宿の利用者にとって、提供される料理と宿泊料金は重要なファクターといえる（図3・図4参照）。宿泊客を満足させるためには、低料金と充実した料理を両立させる努力が求められる。今回のアンケートでは、この両者に対する満足度は比較的高いという結果になったが、郷土料理や和食を希望する利用者が多いことを考慮し、メニューの検討を行うべきであろう。一方、衛生面と施設に対する満足度は低いようである。サービスを低料金で提供している以上、施設の充実には限界があるし、家庭的な雰囲気を壊すような過剰な施設は民宿の本質から逸脱する危険性もある。しかし、衛生面の改善は、宿泊業を営む以上、最優先でなされるべき課題である。

4. 体験型民宿への期待

特に注目すべきことは、体験型民宿の認知度が低いにも関わらず、利用してみたいと回答している者がかなり多いという結果である（図6参照）。今後の民宿は、積極的に体験型観光を取り入れ、利用者にとって魅力のあるプランを用意し、さらにそのことを宣伝していく必要がある。また、体験型のプランを考案する際には、家族・夫婦・友人・仲間で楽しめるものを用意することが前提である。

この体験型民宿の導入にあたっては、その地域の独自性をいかに前面に出せるかが成功の鍵になろう。また、その地域の特性を踏まえて、どの季節をターゲットにするかを明確にすべきであろう。